

## 異文化理解とコミュニケーションへの考察

久保田 信之

### 序

「国際化」という言葉が我が国で叫ばれ始めたのは1974年のユネスコ総会において「国と国との相互理解、国際協力、平和のための教育、および人権と基本的自由についての教育」の確立と推進が提唱されてからであると言える。その時提示された指導原則は

- ① 学校教育は世界的視野を持った教育でなければならない。
- ② いろいろな国の民族、文化、生活様式を理解し、尊重する態度を育てねばならない。
- ③ 世界的視野で見るときに、相互依存関係が緊密になっていることを理解させねばならない。
- ④ コミュニケーション能力を養わなければならない。
- ⑤ 他国の権利、義務を認識し、それを尊重する事を教えねばならない。
- ⑥ 国際的連帯、協力がこれからの世界の中で必要であることを教えねばならない。
- ⑦ 国や世界の問題に皆が参加して解決するということを教えねばならない。というものであった。

これを受けて日本ユネスコ国内委員会も、従来の「国際理解」を「文化間の相互理解」と修正定義し、異文化理解教育の重要性をつぎのように述べている。

「国際理解とは文化の相互理解 Intercultural Understanding だといえる。そして、他国・他民族・他文化の理解では、世界文化の多様性を受容する相

互尊重と寛容な態度および共感的な理解ということが重要となろう」と述べ、他方では「情報化コミュニケーションの一層の充実」をうたいあげているのである。

## (1) 日本の国際化と国際理解教育

わが国にあっては、古代には「中国化」が、また明治以降は「西欧化」が「国際化」の意味内容であり、「追いつけ追い越せ」をモットーにひたすら模倣・輸入に力を注いだ。そして第2次世界大戦終了から東西の冷戦終結までは、いわゆる二超大国が世界を二分して君臨したことに合わせて、我が国はアメリカの核の傘のもとに平和と繁栄を享受した。その関係から戦後の国際化はアメリカをモデルに、カネ、モノ、ヒト、情報の流入流出を大量かつ急速に推し進めていった。Americanize することが日本を国際社会へと仲間入りさせる有効な方法だと認識した。そしてアメリカの情報を多く摂取し、「アメリカに追いつき追い越す」ことこそ最も重要な課題だと政府も民間企業も個々人すらも考えたのである。

ところが地球環境問題や多国籍企業の存在などを念頭におけば容易に理解できるように、日本に限らず現代世界を構成しているすべての国と国民は、従来のような「国民国家」意識ではいられず、国家間の利害関係にとらわれることなく、「宇宙船・地球号」の乗組員だとの認識が必要になってきたのである。その意味では「国際化」とは「中国化」だの「西欧化」ましてや「アメリカ化」などといった狭いものではなく、まさに globalization あるいは transnational なものと解釈すべき時代に入ったとの意見もあるであろう。

したがって、日本の「国際化」も、かつて中曽根康弘が「国際化とは国際社会の中で日本が国家として勝ち抜いていくことだ」と述べたが、「単一民族国家論」を基盤において、日本の国家主義的アイデンティティを強調するような「国際化」論だけでは狭すぎる懸念がもたれたわけである。

いずれにせよ、「国際化」とは実に多くの問題を含んだ複合的な概念であっ

て、多岐にわたる問題をはらんでいることだけは事実である。

国際理解教育も「自国の繁栄と発展のために利用できる先進国」を選定して、その国に追いつけ追い越せ式にとらえることはできない。しかし、いまだに「素晴らしい異国文化を摂取し吸収し受容することが発展だ」と解釈されている。そして採用される方法論も「受容・受信」でしかなく「模倣」「修得」が主となっている。教育の向こう側に到達段階としての「正しい、立派な、本当の」を置き、そこへまで教育の対象を「無駄なく、早く、要領よく」導く働きが教育なのだとの古い教育論がいまだに支配的である。このような教育論そのものの克服が先決であるといわなければならない。

## (2) 国際化は欧米化なのか

そもそも、古い教育論に固執する限り一つの「正しい、立派な、本当の」を定めなければならなくなり、国際化教育も模倣すべき（習得すべき）相手国の言語と文化、風俗習慣を限定しなければならなくなる。

アメリカナイズが国際化であり、アメリカンデモクラシーが最高の主義・主張だとなり、さらには経済優先、功利優先の社会風潮が隆盛をきたすと、アメリカ語に長けていること、アメリカで通用するマナーを身につけること等の「表層的な資質の育成」が、国際理解教育の目指すところとなってしまった。その結果、安直に使われている「国際化教育」とは、アメリカを模倣し、アメリカに近づき、アメリカに通用する知識・技術（語学力を含む）を習得することと同義語になっていったようである。

現代の国際理解教育は、理念・内容においては、欧米を賛美し崇拝した明治時代に逆戻りしたきらいがある。明治時代には「欧化主義教育」が叫ばれ「脱アジア」が進歩思想であったわけであるが、今日の教育もアメリカに比重を置いた欧米崇拝である点では変化がないからである。ここにあって違いを探すならば、単に方法論において文字の読解から言語表現にそのウエートが変わっただけのことである。今日なぜ、日本に欧米崇拝の亡霊を舞い戻らせなければならないのかは大いに検討を要する問題である。アジア諸国、特

に新興産業諸国 (NICS) と呼ばれる国々の内、中国人・華人支配の国々が果たす世界的役割は非常に大きなものがあり、我が国の存立に関しても「脱アジア」などと言っておられない国際情勢になっているのが現実である。それなのに、現在の日本で、アジア諸国を相手としての「国際理解教育」が、あまり根本的な問い掛けになっていないのはどうしたことであろうか。

### (3) 情報化と異文化理解

いわゆる「国際化」がはらむ問題はきわめて多岐にわたることが予想されているが、ここでは、コミュニケーションに焦点をあてて、この問題を考えてみたい。

まず第一に「国際化」している現実として容易に気付くことは「情報のグローバル化」である。いまやわれわれは、好きな時に、好きな所で、好きな相手と自由に情報の交換ができるようになった。厳密にはまだ不可能な問題はあろうが、技術的・理論的には可能となった。いわゆるニューメディアや地球規模ではりめぐらされた情報ネットワークは確実にわれわれの意識を「国際化」させつつある。地球人、世界市民としての基礎感覚を無自覚的に形成しつつあることは否定できない。

このようなニューメディアによる「情報化」の展開を背景にした国際コミュニケーションの技術的領域に関しては、アメリカナイズする道を辿ったことから、いまやアメリカと並んで日本は世界の指導的役割を担うまでになった。先の中曽根のいう国際化を念頭におけば、見事に日本は国際化に勝利をおさめてきたことになり国際化は国益をます素晴らしい動きとなるのである。

しかし、「情報化」とは、実は、意味付け、価値付けがともなわなければ文字がインクのしみであるように、言語が音波でしかないように、何の意味もない「ものの伝達」だけのことなのである。意味のない文字や音声、世界を寸時に駆け巡るようになったからといって、それだけでは「国際化」でもなんでもないわけである。

それゆえ、「国際化」にともなうコミュニケーション問題で、最も重要な

問題は「異文化理解」に象徴されるような文化的・人間的交流の問題なのである。この「文化」に関しては、globalization あるいは transnational な動きが活発になればなるほど、価値や規範の対立をいっそう浮き彫りにする可能性があるのである。

#### (4) 異文化交流としてのコミュニケーション

国際関係から現実を見るならば、70年代初頭の石油危機を欧米諸国を尻目に乗り越え、80年代にいたって「経済大国」と自他共に認められるまでになったという事実が日本にはある。そして、今日では、特にアジア太平洋諸国などでは、いわゆる「ジャパニゼーション」とも呼ぶべき現象が起きつつあり、日本の外に「立派な本当の正しいモデル」を設定できなくなってきたのである。いうならば、従来のように「受け身の国際化」ではなしに「日本が世界各国といかにして付き合っていくか」といった「積極的・発信型国際化」を模索し確立しなければならない時期にきているのである。

日本の技術が優れ経済力がつき、国際的地位が高まったからと言って、「日本が中心になる国際化」すなわち「日本こそ正しく立派で本当のありかたをしているのだから、世界各国は日本をモデルにする」というわけにもいかない。一元化を求める論法は、終点・完成を前提にするから進歩・発展に本来矛盾する。その意味で、情報化が進み、国際化が進むに従ってすべての金属が溶け合い混ざり合って一つの新しい合金になるとの「メルティング・ポット (melting pot) 論」を掲げることは危険である。200年経過した移民の国アメリカでの事例が如実に示すように、すべてが融合し混ざり合って一つになるとか同じになるなど不可能なことであることは論を待たない。民族・宗教・文化は溶け合わない。

しからは望ましい異文化理解教育、コミュニケーション教育とはいかなるものなのであろうか。

「異文化に対し寛容になり、また積極的に世界に貢献することによって、外国から親近感、信用を得ること」(『朝日新聞』社説、1987年1月1日)。

「相互に育った環境、価値観、物の考え方も異なる人々が、お互いの相違を認め合った上で、それを許容し、人間として仲良く、信頼し、理解し合うことのできる社会をつくること」(『読売新聞』論点、1987年8月23日)。

「国際化」とくに「異文化理解」についての模範回答のような主張があった。一見もっともである。しかし、現実にはなかなか厄介な問題をはらんでいる。異文化に対して寛容であるとか、異文化を認め合い、許容するとはいかなる態度を意味するのであろうか。

情報化が進み、世界が狭くなったといわれる現代には、同じ言葉を発し同じ文字を使って、同じ概念を共有する場面を目にする。「情報化」の進展は概念の共有、知識の同一性は形成できるかもしれない。遠く離れた地で起きた事件や災害を時間や空間の隔たりを超えて異国の地に伝達することなど確かに可能となった。情報機器の目ざましい発達がこれらを可能にした。

しかし、それだからといって心の重なり合いが形成されたとはいえない。信仰の異なる者同士の間での交流、文化背景を異にし生活経験の違う者同士の間に深い交流を形成することは、ますます困難になってたことを認めなければならぬ。異文化交流なり異文化理解は、単なる情報の伝達、情報の共有とは異なるのである。

文化人類学者の梅棹忠夫によれば「一つの文化は、一つの価値体系」であるから「その立場からは、他の価値体系は理解することができない。あるいは容認することができない。他の文化に対しては、つねに不信の目をもってみる」ものである。その意味で文化は、「相互不信の体系」でもあるという。

たしかに、キリスト教文化とイスラム文化を並べたり中国文化を並べてみれば明らかなように、たとえ双方を隔てる物理的距離が近く、いつでも情報の交換はできる状態にあったとしても、相互の融和・文化の同一性など不可能に近い。さらに言うならば、社会の構成員たる個々人も、それぞれが受け継いだ特異の文化をもち、その文化を内面化することを通して成長してくるものである。家庭や社会・国家が固有の文化を個人に擦り込むと同時に、個人が所属する組織の統合は固有の文化によって保たれているのだ、という事

実こそ世界の常識なのである。

しかし、日本人は、独自の文化に対する自信が欠落しているためか、はたまた古来、外来文化の受容、外国文化への順応・同化は他国に比して盛んにやってきたがためにか、こういった事実、世界の常識を軽視しがちである。

「話し合えば必ず合意に達するはずだ」「世界は一つ心になれるはずだ」などと呑気な現実無視の意見を吐いてしまうのである。

「人間は皆同じだ」と言う善意にも似た心情が戦前・戦中になされた日本への同化政策であり「大東亜共栄圏」構想となったことは否定できない。

異質性の容認、ユネスコが掲げた「いろいろな国の民族、生活様式を理解し、尊重する」はいずれも「人間皆同じ」では済まされない問題があること、「皆同じ」では見落してしまう問題があることを指摘しているのである。基本的には「AさんとBさんは違う、違うからこそお互いの成長にとってお互いの存在が必要不可欠なのだ」といった理論の構築が、異文化理解とコミュニケーションには必要なのであろう。

## (5) コミュニケーションの構造

西欧的個人主義・合理主義には魅力がある反面多くの欠陥が見出せる。しかし、だからといって、我が国における、家族国家論や儒教こそが人類普遍の「正しい・立派な・本当の」考え方・生き方だ、と主張するつもりはない。それがなんであれ、文化的・思想的普遍性・絶対性を求めることは思考を停止させ対話を不要とするため危険であるといいたい。現にアジア NICS の経済発展を文化的背景の探究から理解しようとしても無理が多い。一元的に考えるよりは、さまざまな要因が統合された結果であると前提した方が正しい結論を導けると思う。われわれが求めることも「正しい・立派な・本当の」考え方・生き方に一元化することではなしに、「違い」の尊重であり、「違い」を自己成長の糧とするコミュニケーションの確立なのである。

一般的に言って、言語、身振り、芸術、制度、歴史的行為その他、人間の社会的、文化的、さらには歴史的所産は、どれをとってみても、そう主張し

語り表出する特定の個人（社会・国家・民族その他）がそれまでに歩んだ全歴史の自己表出であるといえようし、また、見えるもの聞こえるものとして外に現れた事象（気持ちや主張）はいずれもその背後に多種多様な要素をなす体験・経験があるわけである。その意味でも、われわれが直面する事象・現象は、まさに氷山の一角のようなものであって、その背後・深層部は膨大な因素から成っていると考えるべきであろう。

Aさんの気持ちや主張も、たとえ些細なことであっても、その背後には、これを生み出し発言・表現するまでにいたる「Aさんの生活歴」あるいは「Aさんの精神的生」すべてが作用していると考えるべきであろう。Aさんは、自分と違う立場、経験の持ち主なのであるから。

このことは同時に、受け止める側・主体の側にも言えることである。主体の深層部は、独得の経験・生活歴によって形成されてきたわけであるから、外にある事象・現象に対してなす意味付け、価値付け、受け止め方はその人独得である。すなわち受け止め方・見方は観察者の精神的生の表出なのである。

文字、音声、さらには表情、身振り、態度その他さまざまな媒体を通じて表出される情報を手掛かりに、それを受け止める主体の方も、すべての受容機関をフル活動させ、今までの経験・体験を総動員させて繰り広げられる精神作用、これがコミュニケーションなのである。

二人称を「あんた」と表現することになんらの抵抗を感じない経験の持ち主と「あんた」と言われただけで嫌悪感を感じ思考が停止する人がいる。どちらが立派で正しいのか、判定は不可能であり不要である。

大切なことは、情報の送り手も受け手も等しく独特の背景をもっており、独自の価値観・人生観・美意識をもっている事実を謙虚に認めることであろう。

## (6) 一元化は危険

ところが、われわれが日常多く体験する議論には「これは絶対だ」いや「これこそ絶対だ」といった「絶対の優位を争う議論」、すなわち、AとBではどちらが「正しい・立派な・本当の」主義・主張かを争うものがある。



「話し合い」とか「コミュニケーション」と称しながら、実は、違いを論破し「雌雄を決する戦い」になってしまう場合が多いようである。

「正しい・立派な・本当の」考え・生き方が、何処かに一つあるはずだ、との前提に立つ人はこの種の戦いを意識的にせよ無意識的にせよ実施してしまう。

価値を一元化せずにはいられない人、すなわち、「絶対」が一つに決定されなければ不安でならない人にしてみれば、それ以外の意見は、よくて「認識不足な愚か者の主義・主張」になろうし、わるくすると「悪意に満ちた危険な・邪悪な者」の主張になってしまうのである。「違い」はまったくその価値を失うのである。「長いものには巻かれろ」「長幼序あり」「波風たてるな」等々の「違い」を抹殺する風習がある社会では、「違い」はマイナス価値となろう。

しかし、立場が違い、生き立ちが違うことこそ人間存在の本質であるため、「違い」の抹殺は「思考の停止」以外のなにものでもない。人間の前に絶対確かなものを提示された途端に知的活動は停止するのである。

年齢が違い、立場が違うAさんとBさんとの精神的関わり合いを深め広げ豊かなものにすることによって、個人の成長発展を求めることこそ「教育の目的」なのである。「違い」を軽視したり排除するがごときは最も「非教育的な行為」なのであるが、「正しい・立派な・本当の」を知らない輩を相手にして「正しい・立派な・本当の」ところまで導く働きだ、と教育を誤解するむきもあることは認めなければならない。

## (7) 「違い」に遭遇したとき

ここで先ず注目したい問題は、「自分の意見や考えと異なる主義・主張に出会ったときにわれわれが示す精神現象」はいかなるものか。さらに大きく言えば、異文化に接した際に現れる精神現象がいかなるものか。他者や異文化を「真に理解する」「違いを真に尊重する」とはいかなる精神活動なのであろうかについて考えてみたい。一般に、幼時から、意図的・無意図的に繰

り返し教えこまれてきた考え・生き方と異なる文化や事象に、さらには異なった価値観に直結する生活様式・文化に出会った時の対応はいかなるものであろうか。

異文化を理解するとはいかなる精神状態を言うのであろうか。理解すると類似の、承認する、分かる、納得する、などと表現する理解のレベルはいかなるものであろうか。

### 浅い理解〔干渉しない、束縛しない〕

Aさんの気持ちや主義・主張が「分かった（分からない）」という状態を考えて見たい。「理解した（できない）」と言うレベルと、さらには「納得し、承認できる（できない）」というレベルとも、それぞれ異なることに気付く。

「Aさんの言いたいことは分かった。しかし、賛成はできない」

「かれはかくのごとく主張している。かれの言わんとしていることはこれこれだ。わたしとは違う」

というレベルがあるように思う。これらの発言は浅い理解と言って良いであろう。

「分かる」と言われる精神作用は、主体が対決する現前の事象・現象を、限定された視点に基づいて眺め観察し分析して、その結果を観察・分析の視点に基づいて提示する。その事象・現象を説明できる時にも使う。この種の「分かる」は主体的価値判断を排除した方が良く分かるというケースがある。例えば、医者は最愛のわが子を診断しながらないしましてや手術を要する場合には友人の医者に託すと言う。主体と客体の間に「精神的距離を置く」ことが自然科学が採用した観察といった方法論の鉄則であろうが、生活や歴史の共有などがなく、心の重なり合い等無い方が冷静に客観的に観察し説明でき「分かる」ことができるのであろう。

これをレベルの浅い理解といたい。浅い理解であれば、相互に矛盾していようが心底理解し納得していなくとも、自分とは違う多様な主義・主張を同時・平行的に「認める」ことができる。これが「干渉しない、束縛しない、

それぞれの自主性を重んずる、……」になるのであろう。

### 完全な理解〔一心同体、共に泣き共に笑う〕

ところで、体験を理解し了解するとは、一般的に言って、その対象の意味や本質を対象そのものから直接的に把握することだとも言われる。

物質的変化や経済的変化・変動が、直ちに生活信条の変化・生き方の変化をもたらすものではない。価値において真に異質なものととの出会いは、当の本人にとってきわめて難しい局面を迎えるものであることを知らなければならない。それだけに、文化背景が異なり生い立ち、経験がことなる他者を理解し他の事象を了解することは容易なことではない。

共通の創造者を父とする彼造物であるならば共通の生の体験も可能であろう。人間の歴史的・精神的生の基礎構造を明らかにすることが可能であるとの立場を確立した欧米の思想家もいる。新しく出会った個人的あるいは集団的文化であろうと、これらを真に理解し了解する健全で精神的移行・脱皮は、その文化を形成させたいわゆる生活を、あるいは歴史を共有することができれば、かれらの言うとおりの「精神生活の全体」を共有することができるであろう。「生の体験とその表現の機能は、量的な差こそあれ、各人共通である」とディルタイは言う。これこそ深い理解の本質であるとの主張は、文字面では「分かる」。しかし、正直いってわれわれ非キリスト者には生活実感が伴わない。

実存哲学の書物はいずれも「難解」である。しかし、そもそも「生を共有できない」事例の方が多し、「西欧的既得の枠組みを超えた事象」の存在は否定できない。それらを追体験することなどできるものであろうか、との疑問が湧く。

K. ヤスパーズはその『精神的病理学』において「病める精神生活をありのままに把握すること」を目指した。この点ではディルタイの了解心理学を踏襲する。しかし、「理解は究極において理解不可能なものに突き当たる」と述懐して、「理解を超えたものとしての実存」を強調し「外からの内面へ

の侵入」を拒否して見せた。完全な理解は現実的でなく人間業ではないのであろう。大事な指摘である。

貧弱な経験しか持ち合わせていないというのに、大胆不敵に相手の心に土足で入り込み、したり顔をして説明し分析するがごとき不遜な態度は慎むべきであろう。

ところで、異質の価値基準から発せられた主義・主張、「既得の枠組みを超えた言動・事象」に出会った時「あの人は病気です。異常なんです」と言って拒否し危険視したくなる。これは確かに「自己の枠組みでは説明ではない」心情を表した言葉であり「突き放した認知」なのであろう。

#### (8) AはAであってBにはなり得ない。

「違いを尊重する」「お互いの主義・主張を理解しあおう」が「あなたが右に行きたければいったらよい、わたしは左に行く」「私は反対だがあなたが良いというならそうしたらよいではないか」「あれも良いがこれも良い」「こうも言えるしああも言える」「君の主張もわかる、別に私は反対しない」といった「浅い理解」「寛容」が案外横行しているのは困りものである。違いに対して、「よくて無関心」「悪くすれば（相手が自分より弱いと思えば）敵愾心」を燃やして拒否する。いずれも「私の心の中には入れないが否定はしない」「私とはまったく別の世界の人間だ」というのであろう。

事実、20世紀になって、文化人類学者たちは、こぞって「西欧の近代人」がもつそれと大きく異なった世界像およびそれに応じた構造をもつ生活形態の存在を実証してみせた。これらがきっかけとなって、ヨーロッパ合理主義が普遍性を主張してはならないとの謙虚な主張がなされてきたのである。

戦後教育の主要なテーマであった「主体性の尊重」も「平和主義」も自己崩壊を結果し、結局は、手も足も出ない、出せない、判断力・決断力のない、存在感の薄い人間を世に送りだしたのである。いじめられて自殺を決意するまで追い詰められた中学生が遺書に「自分をいじめた相手を責めないでくれ」としたためていたと言う。まさに「左の頬を打たれたら右の頬をも出せ」を

地でいった聖人であるし、この少年の生き方からは、残念ながら、燃えるような正義感が微塵も感じられない。「正義」よりも「平穏無事」に価値をおいてしまったのは成長も発展も、感動も怒りもなくなってしまうのである。

こういった「混沌と矛盾の同居」は自己崩壊をもたらす。いわゆる「平和主義者 pacifist」を欧米では優柔不断の日和見主義者と同義語に使われている。「浅い理解・寛容」の姿勢を採るかぎり真剣な対話も成立しないし積極的対応をも不可能にしてしまう。

さて、完全な理解も、さらにまた自分の心を無にして相手の主張を全面的に受け止めるなどという行為も、実は現実的でなく人間業ではないはずである。心の空洞化を受け止めてくれる人が、家庭にも、学校にもいなくなったがために、カウンセリングが話題になっている。しかし、カウンセリングを過信したり乱用することは危険だと言いたい。どれほど訓練を受けたカウンセラーでも、人間である以上どうしても貧弱な偏った経験しか持ち合わせていないはずである。経験も違い価値観も違う相手の心と相対する事自体、普通の神経の持ち主ならば、躊躇して当然であろう。したり顔をして説明し分析するがごとき不遜な態度をとって恥じないような不誠実さはつとに慎むべきであろう。

#### (9) Aの正当性をBは認めてAに同化すべきだ

自分の外に「絶対」をおいても、逆に自分自身の内部に「絶対」をもっても確かに精神的には安定しよう。しかし、安心立命は成長の停止である。「絶対」にしがみつくと人間は固い心の持ち主で「支配か服従か」の二者択一論を振りかざす。

よくある例だが、Aは心の安定を得るために「どこから批判されても自己の正当性を立証できるまでに磨き上げた理論」を構築しようと努める。その結果、Aが「これこそ絶対だ」「一番正しく立派な主義・主張はこれだ」と自認し時には、「違い」Bの存在を許せなくなる。「これを容認しない奴は愚か者だ」「俺に同調しない奴は敵だ、危険だ」となる。

異質の価値基準から発せられた主義・主張、「既得の枠組みを超えた言動・事象」「自己の枠組みでは説明ではない心情」に出会った時「あの人は病気です。異常なんです」と言って拒否し排除する例にもであう。

異文化理解の場面からも同じようなことがいえる。キリスト教文化を背景に生まれ、近代を切り開いた個人主義・科学主義こそ「正しい立派な本当の」考え方であり生き方であって、日本はこれを学ぶべきであり、欧米に追いつき追い越さなければならない」こういった主張は、産業化とは大変な難事業であって、特別に恵まれた社会的・文化的条件の下でしか達成できないのではないか、と思われていた時代までは主流をなしていた。

しかし、欧米が経済的に疲弊し社会が混乱してくる反面、アジア NICS が経済的に力をつけてくると、逆に、欧米の個人主義は家庭を破壊し、科学技術万能は自然を汚染し資源とエネルギーを枯渇させる危険性の高い間違った危険な思想である、との主張が力を得てきた。そして、アジア的家族主義・儒教道徳こそが人倫の道である。個人主義と家族主義が経済競争をしたら個人主義は負ける。等々、これに類した主張が多くの知識人の口からもでるようになった。「西洋の文化は劣っている」「21世紀はアジアの時代だ」と言った説が、それなりの資料を駆使した結果として出されるようになったのである。

前者であれ後者であれ、いずれにせよ「絶対」を尺度として現実を見てしまうから、どうしても現実のもつ多様性を見失ってしまう。

実存哲学者はこの過ちを指摘した。「相対的見方をするな」と。しかし、そう言われても、神でない人間、同じ神を内在していないわれわれにできる話ではないことも事実である。

「完全な理解などは成立しない」との結論は「分かりやすい」。しかし、それでは人間であることを放棄せざるを得なくなる。アナーキー、ニヒリズムに落ち込む他はない。われわれは好むと好まざるとにかかわらず、「他者（違い）と共存している」し、人間であり続ける他なく関わり合いを遮断できない存在なのに、人間不信をもたらし、教育の否定に通ずるようでは現実

的な理論とは呼べない。

#### (10) 現実的理解について

コミュニケーションにとって、これこれの理由でこちらの方が正しい立派な本当の考えである、と正当性を強力に証明する姿勢では「違い」の価値を無視し抹殺するのであるから、成長も発展もここには望めない。

一方、どちらも正しく立派で本当の考えだ、あれも良いがこれも良い式の相対主義は、確かに争いは避けうるし、どちらからも敵視されない。一見寛容の精神がみなぎっているようにも思える。しかし、これでは、決断と実行が阻害され、現実によってテストすることすらできないのであるからこれまた発展性がない。日和見・平和主義は、この意味で危険である。

異文化理解教育が目指す「理解」とは、ある種の「絶対」との同化でもなければ、個々バラバラでもない。

ハイデッガーは、理解に存在論的基礎を与えた。かれの場合、理解は気分や語りとともに、人間存在を構成する基本的なあり方として位置づけた。何かを理解するとは、その何かを「することができる」というレベルにまで具体化することを含んでいる。理解するとは、それ以前とは違った、いわば、「自分の可能的あり方」を形成する状態をいうのである。存在構造を変化・変質させる行為なのだというのである。

その思想を受けるならば、「違い」に出会うことによって己が成長脱皮することをもって理解と呼ぶべきではないか、といった議論も当然なされる。逆の言い方をするならば、成長の糧にまでなした時に「違いを理解した」というのであろう。

AはBとの出会いによってA'に成長し、BもAとの出会いによって以前とは違う自分B'に脱皮する。こういった成長、過去からの脱皮を可能にした「違い」との出会いを「理解」と呼ぶのである。

## (11) 結論に代えて

教育の目指すところは、「違い」に出会わせて、敏感な、柔軟性・発展性に富んだ謙虚な心を形成することである。教育の媒体となる領域に対して興味・関心を高めることである。そのことが気になって気になって仕方がない、と言った「瑞々しい感受性」をもった心に成長させる働きなのである。

異文化理解も教育の問題とするならば、異国の文化に対する盲目的信奉者にさせることでもないし、異国に関する知識・情報を多数持たせることで終わるものではない。日本人であることを再認識させ、より良い日本人に成長させるために異文化との接触がなされるべきであろう。異国の文化を情報として入手したならば、それに対応した、あるいは対応しきれない自国の文化は何であるか等、自分・自国を映し出す鏡として、あるいは、自国の文化を新たな目で見直すキッカケとして「違い」を活用できれば異国の文化を「理解」したといえるのであろう。

われわれ人間は、「多様な違い」との間に相互作用を形成することで、初めて幅広い柔軟な成長力のある優れた人間になりうるのである。人間関係が貧弱であると、どうしても貧弱な人間にしかなり得ない。

異文化とのコミュニケーションも同じことで、自分を見つめ、自分を成長させ脱皮させるために、なによりも「違い」との出会いが必要なのである。異文化を理解したならば、それと違う自己・日本を見出せるようになる。

異文化を理解したという時も、自己を変革・成長・脱皮しえた時に使うべき概念なのであろう。日本の特徴、欠点・長所の認識に異文化との出会いは欠かせない。

外国語の習得も同じで、異文化を背負ったこの言葉を日本語で表すとしたら何が適切かを悩み模索することによって、異文化に興味が湧くし、日本語に対する造詣も深まる。この日本語を文化背景が違い歴史風土が違う異国の言葉によって表そうと模索すれば、言葉の背後にある文化に興味を持ち、言葉遣いに敏感になり、言葉に対して謙虚になる。自国の文化を以前よりも深く、親近感をもって自覚するようになるのである。



翻訳を手がけることによって我が国とは違う異国の文化の面白さをも発見でき、適切な言葉を探して語彙も深まる。さらに発展して言葉の面白さをも以前とは比べようもないまでに広がりをもつ。翻訳を手がけることによって自己の成長が自覚できるのである。

異文化理解教育、コミュニケーションは、違いを成長の糧にすることであり、心を成長・発展させ、人間を謙虚にさせるために重要・不可欠な行為なのであるといえよう。

### 参考文献

- 日本ユネスコ国内委員会『国際理解の手引き』東京法令出版 1982年  
古田暁監修『異文化コミュニケーション・キーワード』有斐閣 1990年  
文部省『中学校学習指導要領』文部省 1989年  
文部省『高等学校学習指導要領』文部省 1989年  
村上泰亮『反古典の政治経済学』上・下 中央公論社 1994年  
梅棹忠夫『地球時代の日本人』中央公論社、1980年  
『ヤスパース撰集』理想社  
『ハイデッガー撰集』理想社  
加藤秀俊『人間関係』理解と誤解 中公新書 106

(くぼた のぶゆき 本学教授)